

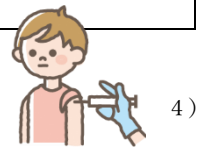
【満5～11歳の接種対象者と保護者の方へ】

# 新型コロナウイルスワクチン接種の考え方（初回接種用）

## 1. はじめに

小児に対する新型コロナウイルスワクチン（以下ワクチン）に関する有効性と安全性の情報が蓄積され、メリット（発症予防や重症化予防）がデメリット（副反応）を大きく上回ることがわかり、5～11歳のすべての小児へのワクチン接種が推奨されるようになりました<sup>1)</sup>。

この資料をお読みいただき、ワクチンのメリットとデメリットを養育者と本人が十分理解し、不明な点や心配な点があれば、接種の予約をする前にかかりつけ医に相談をして、接種を受けるかどうかの判断をしてください。接種を受けるか迷っている方だけでなく、接種を希望している方も必ずこの資料をお読みいただくようお願いいたします。



## 2. オミクロン株の小児への影響

小児の新型コロナウイルス感染症の95%以上は軽症ですが、クルーズ症候群、熱性けいれんなどを中等症や、入院治療が必要な小児多系統炎症性症候群\*、脳症、心筋炎などの重症例が報告されています。オミクロン株による第6波の流行以降、小児患者数の急増に伴い、以前は少数であった小児の重症例と死亡例も増加しています。\*小児多系統炎症性症候群：新型コロナウイルス感染後の小児が、発熱の他、腹部や循環器など複数の臓器に強い炎症を起こす症候群

## 3. 小児のワクチン接種の考え方

### ① まず周囲の成人がワクチンを接種しましょう

周囲の成人への適切な回数（3回目または4回目）のワクチン接種が重要です。

### ② 基礎疾患を持つ小児へのワクチン接種は、主治医と相談してください

重症化リスクが高い基礎疾患のある小児に対しては、重症化予防の観点から年齢にかかわらず、ワクチン接種が推奨されます。接種については、本人の健康状況をよく把握している主治医と養育者の間で、接種後の体調管理等を事前に相談してください。リスクの高い基礎疾患については、「新型コロナウイルスワクチン接種に関する、小児の基礎疾患の考え方および接種にあたり考慮すべき小児の基礎疾患等」<sup>2)</sup>を併せてご参照ください。

### ③ 5～11歳の健康な小児へのワクチン接種はどう考えたらよいか

5～11歳の健康な小児に対してもワクチン接種が推奨されます。世界各国からの大規模な研究成果が蓄積され、オミクロン株を含めて重症化予防効果が40～80%程度認められることが確認されました。また国内の安全性データも集積され、5～11歳における副反応は、12～17歳や若年成人より軽い傾向が確認され、ワクチンのメリット（発症予防や重症化予防）がデメリット（副反応）を大きく上回ることがわかりました。

接種を受けるかどうかは、養育者がメリットとデメリットを十分に理解して判断することが重要です。また養育者は子ども本人の理解度に合わせてわかりやすく説明し、子ども自身も考え、意思を伝えることができる環境を整えてあげることが大切です。

## 4. ワクチン接種に迷ったら

接種のメリットとデメリットを比べてみましょう

### 【メリット】 発症予防など※1

- ① 感染しても発症を防ぐ効果
- ② 発症しても入院を防ぐ効果
- ③ 発症しても重症化を防ぐ効果

※1 海外ではオミクロン株流行以降の、5～11歳の小児に対するワクチンの感染予防効果は31%、発症予防効果は51%、入院予防効果は68%と報告されています。重症合併症の一つである小児多系統炎症性症候群の発症は約90%予防されています。

### 【デメリット】 副反応など※2

- ① 接種後に、接種部位の痛み・発熱・だるさ・頭痛などの症状を認めること
- ② 接種後に、まれにアナフィラキシー（強いアレルギー反応）を起こすことがあること
- ③ 接種後に、まれに軽症の心筋炎を起こすことがあること

（国内の5～11歳では0.00026%の頻度）

※2 米国の小児用ファイザー社製ワクチン接種後の健康状況調査では、2回接種後の副反応は、接種部位の痛みなどの局所反応が57.5%、発熱、だるさ、頭痛などの全身反応が40.9%に認められ、発熱は1回目接種後7.9%、2回目接種後13.9%に認められたと報告されています

## 5. 接種後、ごく稀に見られる心筋炎や心膜炎についての注意点

接種後数日以内に胸痛、息切れ（呼吸困難）、動悸、むくみなどの症状が現れた場合は、すぐに医療機関を受診し、新型コロナワクチンを受けたことを伝えてください。



## 6. すでに感染した方へのワクチン接種

新型コロナウイルスに一度感染した方も再度感染する可能性があります。また自然に感染するよりワクチン接種の方が、新型コロナウイルスに対する血中の抗体価が高くなるため、感染歴がある方もワクチン接種を受けることが推奨されます<sup>3)</sup>。感染歴のある方が接種を受ける時期については、かかりつけ医と相談してください。

## 7. 他のワクチンとの間隔についての注意点

ワクチンは3週間の間隔をあけて2回接種を行います。定期予防接種など他のワクチンを受けた場合は、2週間以上の間隔をあける必要があります。但し、インフルエンザワクチンとの間隔はあける必要はありません。

### 【出典】

- 1) 日本小児科学会・感染予防接種・感染症対策委員会  
「5～17歳の小児に対する新型コロナワクチン接種に対する考え方」（2022年8月10日）  
[https://www.jpeds.or.jp/modules/activity/index.php?content\\_id=451](https://www.jpeds.or.jp/modules/activity/index.php?content_id=451)
- 2) 日本小児科学会・感染予防接種・感染症対策委員会  
「新型コロナウイルスワクチン接種に関する、小児の基礎疾患の考え方および接種にあたり考慮すべき小児の基礎疾患等」  
[https://www.jpeds.or.jp/modules/activity/index.php?content\\_id=409](https://www.jpeds.or.jp/modules/activity/index.php?content_id=409)
- 3) 厚生労働省 新型コロナワクチンQ&A「新型コロナウイルスに感染したことがある人は、ワクチンを接種することはできますか」  
<https://www.cov19-vaccine.mhlw.go.jp/aa/0628.html>
- 4) 厚生労働省 5歳から11歳のお子様と保護者の方へ 新型コロナワクチン接種についてのお知らせ